opusdei.org

属人区長の手紙 (2010年7月)

仕事を神への祈りに変える。 オプス・デイの与える形成を 通して数多くのキリスト者に 想い起こさせるメッセージは されである。7月の手紙にお いて、属人区長はこの点をさ らに深める。

2010/07/05

愛する皆さん、イエスが私の娘たち と息子たちをお守りくださいますよ うに! 1975年6月26日、神が創立者を天国 の永遠の至福にお呼びになってか ら、35年もの年月が過ぎ去りまし た。これまでの記念日と同様、世界 中で聖ホセマリアの典礼上の祝日を 祝って捧げられた記念ミサに多くの 人が参列しました。聖なる創立者の ような牧者を世界と教会にお与えく ださった主への熱烈な感謝の祈り が、世界の各地から捧げられまし た。創立者は、キリスト者としての 生き方の模範であり、私たちの霊的 あるいは物的に必要なあらゆること におけるこの上もない仲介者です。

さらに、祝ったばかりのこの祝日 は、神のみ旨によって聖ホセマリア が人々に教え広めたことを掘り下げ て考えるための絶好機です。それは、 恩恵の助けを受けて聖性に達する事 が可能であり、またそうするべきだ ということ。すなわち、専門職と日常 生活の様々な状況での務めを忠実に 完全に果たすよう努めることを通し て、愛徳の完成、神との全面的な一 致に至るということです。

この教えの核心となる点、つまり、 手什事であれ知的な什事であれ、あ らゆる仕事を真の祈りにするよう努 めるという必要性についてよく考え ましょう。福音書は「気を落とさず に絶えず祈らなければならない L[i] と明確に述べています。そして聖パ ウロはこの教えを繰り返し、sine intermissione orate絶えず祈りなさ い[ii]、と加えています。これは命令 に等しい勧めです。しかし、この教え を誤って理解し、絶えず口祷を唱え たり念祷をしていることが必要だと 考えてしまうなら、実践不可能なこ とになってしまいます。この世に生 きている私たちには不可能なことだ からです。家庭や職場、社会やス ポーツなどにおいて、携わっている 様々な役目を果たしていくために は、多くの場合、記憶力と知性を全 面的に傾注し、確固とした意志で取

り組むことが要求されるのです。また、睡眠に必要な時間を当てる必要もあります。この最後の点に関して、睡眠も祈りにすることができると長年教えてきた聖ホセマリアが、聖ヒエロモの記述の中に同じ考えがあるのを見つけたときの喜びが思い起こされます。[iii]

神であられる師が急き立てておられ るこの真理の深い意味を考察しなけ ればなりません。主は、私たちが、 あらゆる事柄を祈りに変える熱意を もって、人間の存在すべてに活力を 吹き込むようにと招いておられるの です。言葉で表さないとしても、 「心臓の鼓動のように絶え間ない」 [iv]祈りにするのです。聖ホセマリ アは、ご自分の子どもたちとオプ ス・デイの精神に従って聖性の道を 歩もうと望んだ全ての人たちに、こ う教えました。「オプス・デイの武 器は、仕事ではなく祈りです。それ

ゆえ私たちは仕事を祈りに変えて、 観想的な心を持つのです。」[v]

仕事を祈りに変えること。生活の 様々な場面で観想者として過ごす 日々の努力は、聖性という高い目標 を目指すことですが、これは、恩恵 の助けによって達成可能なことであ ることを確信しましょう。「信者が 什事を通して自己を聖化するための 助けとなる霊性に生きることが必要 です | [vi]と、教皇様が聖ヨセフの 姿を示して確言されました。大多数 のキリスト者にとっては、普段の仕 事に聖性の熱意を持って携わること によってのみ、キリスト者としての 生き方を極めるということを本気で 望むことが可能になるのです。

子どもたちの手紙を読まれるとき、 創立者の心には感謝があふれ出てい たことを思い出します。農業に従事 していたあるオプス・デイのメン バーの手紙を受け取られた時の感動 はひときわでした。その手紙には、 毎朝、非常に早起きをしていること、 といるように神様があるといるになれるようクターである。 「聖母のがいたのではであるとと が必られていたのでは、農業の現場においても観想生活が営まれていることを確認し、 に喜ばれたのでした。

する時です。教会共同体生活および キリスト者家族の生活は全て、これ に方向付けられていなければなりま せん。」[vii]

創立者は、この教えを何度も何度も 繰り返し、「観想とは特別な人だけ のものではない」と強調しておられ ました。そして、皆がしっかりと心 に刻み込むために、非常に分かりや すくこう話されました。「宗教に関 して初歩的な知識しか持っていない 人達は、観想とは一日中、恍惚状態 にあることだと考えます。これは無 邪気極まりない考えです。修道者た ちは修道院の中で一日中、種々の仕 事をしています。修道院を掃除し、 生計を立てるための仕事に携わって いるのです。観想修道会の修道士や 修道女たちが、度々、オプス・デイ への期待と愛情のこもった手紙を下 さいます。それには、私たちのため に祈っているとしたためられていま す。多くの人が理解しない点、つま

り社会の中での諸活動に携わりつつ 観想者として生活している私たちの ことを理解してくれているので外で 私たちにとっての修道室は戸外で す。なたちにとってが私たちのこもる場所で す。味を失わないように努めて、 ばなりません。私たちにとってが がなりません。私たちにとってが 場所なのです。」 [viii]

体の健康を保つには、息をするため の空気と血液の循環が必要なよう に、霊魂にとっては四六時中、神と 関わり続けることが必要です。です から、真の信心生活があるならば、 什事や休息、喜びや悲しみ、成功や 失敗、睡眠や徹夜で過ごすときな ど、全てのことを主に関連付けるよ うに促されるのです。1984年、ド ン・アルバロはこう書かれました。 「世俗の務めと霊的生活、仕事と祈 りとが〈トラブルもなく〉、大体う まくかみ合っているレベルで満足し

てはならず、両者の間に完全な一致があり、両者が区別できないように溶け合っていなければならないのです。仕事は祈りによって育まれ、祈り自体が仕事を活き活きとしたものにします。」[ix]

この目標を達成するためには、恩恵 の助けと共に、絶え間ない個人的努 力が必要です。この努力はしばしば 小さな心遣いに表されます。たとえ ば、外出したり仕事中に一息入れた りする時を活用して射祷や短い口祷 を唱えることや、仕事場の目立たない ところに置いてある十字架像や聖母 像に愛のこもった視線を向けること などです。このようなことは全て、 私たちが日々、特にミサ聖祭と念祷 において深めるよう努めている主に 向かう心を、いつも生き生きと保つ ために役立ちます。こうして、携 わっている様々な務めを果たすこと に長時間没頭しているとしても、心 は主のうちに留まり、無言のうちに

主との語り合いを続ける事になります。意識することがなくても、愛情を持って、携わっていることを捧げ、ごく小さなことまで全てを主への愛のために果たす望みを持つようになるのです。

このような望みがあるなら、専門職は人間的超自然的な諸徳を実行する戦いの場になります。勤勉さや秩序正しさ、時間の活用や仕事を最後まできちんと果たすための剛毅、小さなことを大事にすること、誠実で細やかな愛徳の表現である人々への多くの心遣いなどです。

「仕事を祈りに変えるといってもむずかしいことではありません。神に 仕事をお捧げして着手するや、神は もう私に聴き入り、私を励ましてく ださいます。日常の仕事を通して、 観想生活を会得しましょう。神は常 に見つめていてくださいます。しか し、それと同時に小さな犠牲、都合の

悪い時に訪れる人に対する微笑み、 快くはないが急を要する仕事から始 めること、整理整頓に細かく気を配 ること、あまりにもあっさりと放置 しがちな任務を遂行するための忍 耐、今日すべきことを翌日まで延ば さないことなど、新たな戦いを要求 なさいます。全ては父なる神に喜ん でいただくためなのです。そして、 あなたの机の上とか、あるいはどこか 目立たないが観想的精神を目覚ます のに役立つようなところに、十字架 像をおきましょう。十字架は、あな たが心と知恵で奉仕の教えを学ぶ教 科書ですから。」[x]

創立者は、仕事を祈りに変えるよう熱心に勧めましたが、主のためだけの時間を決して放棄してはならないことも同様に強調しておられました。度々ミサに与り聖体拝領をすること、念祷、ロザリオの祈りや教会の伝統的な信心業を大事にすることです。仕事の過密なスケジュールや疲

れ、遅かれ早かれ誰にでも起こり得 る無味乾燥ゆえの大変難しい時期に あるときこそ、信心生活をより大切 にし、実行するよう気をつけるべき です。ドン・アルバロが思い起こさ せてくださいました。「このような 信心業を、什事を中断する事柄のよ うに思ってはなりません。それは一 日の流れの中に入り込んできた異物 のようなものではないのです。祈る とき、〈神聖〉な活動に没入するた め、〈俗界〉の活動を放棄するので はありません。むしろ反対に、祈り は、キリスト者のあらゆる活動に影 響を及ぼす、最も濃密な時間なので す。心の深奥からの祈りは、祈りの 前に成し遂げた什事と祈りの直後に 戻ろうとしている仕事の間に、より 深いつながりを育みます。またこれ と並行して、まさに仕事から念祷や 口祷を燃え立たせる材料を得、仕事 によって、常に新たな礼拝、感謝、 神への信頼に満ちた委託は奮え立つ のです。 | [xi]

近日中に、エクアドル、ペルー、ブ ラジルにいる私の子どもたちに会 い、使徒職を励ますために出かけま す。皆さんにお願いします。今度 も、いつものように祈りと仕事を捧 げることで、また休暇の期間を楽し んでいる人たちは、その休息を捧げ て、私の旅行に付き添ってくださ い。休暇の間も、創立者の教えを思 い起こしつつ神との付き合いを大事 にして下さい。「私の考えによれ ば、休憩するとは日々の仕事を離れ ることであって、暇つぶしの日々を 送ることではない。休息を取ると は、取り返すこと、すなわち力や理 想や計画などを蓄えることである。 要約すれば、再び英気を取り戻してい つもの仕事に戻るため、仕事を変え るということである。| [xii]

今月は愛するドン・アルバロが主に「ここにおります」と答えられてから75周年の記念日を迎える月でもあります。あなたたちと私の忠実が、

日々、掛け値なしのものであるよう に、また私の数々の意向をあなたた ちが支えることができるよう、その 取次ぎにより頼みます。

心からの愛情を込めて祝福を送りま す。

皆さんのパドレ

†ハビエル

パンプローナ、2010年7月1日

[i] ルカ18,1

[ii] 1テサロニケ5,17

[iii] 聖ヘロニモ、『詩篇について』 詩編1の解説参照(CCL.78,5-6)

[iv] 聖ホセマリア、『知識の香』8

[v] 聖ホセマリア、1959年4月23日家 族の集まりでのメモ [vi] ベネディクト十六世、2006年3 月19日説教

[vii] ヨハネ・パウロ二世、2001年1 月6日使徒的書簡『新千年期の初め に』31

[viii] 聖ホセマリア、1964年10月30 日家族の集まりでのメモ

[ix] ドン・アルバロ・デル・ポルティーリョ、1984年12月7日"II Sabato"誌上の記事II lavoro si trasformi in orazione. (『Rendere amabile la verità』1995年ヴァチカン出版、p.649)

[x] 聖ホセマリア、『神の朋友』67

[xi] ドン・アルバロ・デル・ポル ティーリョ、前掲書pp.650-651

[xii] 聖ホセマリア、『拓』514

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/shu-ren-qu-chang-noshou-zhi-2010nian-7yue/(2025/12/13)